

幻想の「帝国」とその破綻

——ファシズム体制への国民の「同意」はあったのか？——

高 橋 進

はじめに

2014年から15年にかけて、アフリカからイタリアへの地中海経由の難民船の殺到が再び世界の注目を集めている。新聞報道によれば、アラブの春以来、北アフリカから欧州に渡る難民の密航船は急増し、2013年は約10万人、2014年は約28万人、2015年はイタリアだけで50～100万人になると予想されている（『朝日』2015年4月25日）。この記事に出てくる難民・密航者は、アフリカ東部エリトリア出身者や内戦状態のソマリア出身者であり、リビアからの密航船でイタリアにやってきている。偶然ではあるが、これらの地域はすべてかつてのイタリア植民地である。そして、ここに名前を出てこないエチオピアを加えれば、アフリカにおけるかつてのイタリア植民地がそろそろ。植民地時代はイタリアが支配・抑圧し、入植者・労働者を送り出し、原住民を人種隔離していた地域から、今日では逆にイタリアに難民として大量にやってくる状況になっている。2・3年ほど前にはチュニジアから出港したアフリカ・中東の難民船がイタリアのランペドゥーサ島を目指して押し寄せてきていたが、このフランスの元植民地のチュニジアでもイタリア人は特権を認められていたのであり、因縁のある国であった。まさしく歴史の皮肉である。この難民の殺到に対して、イタリアの右翼ポピュリスト政党である北部同盟は、密航を阻止するため「リビア沖の海上封鎖」を主張している（『朝日』、同上）。人道を無視した、かつての

植民地支配の反省を欠いた、そしてグローバルに問題の解決を考えないまったく自国本位の主張であると言わざるをえない。

ところで、スペイン、ポルトガル、イギリス、フランスなどのヨーロッパの強国の植民地帝国が数世紀に渡って諸大陸に膨張してきたことと比べると、イタリアではアフリカ「帝国」の獲得、すなわち「海外領土」(oltremare)の建設の夢と実現はかなり遅く、面積的にもわずかで、そして短期間しか続かなかった。エリトリアは1882年、ソマリアは1889年で19世紀末に植民地にしたが、リビアは1911年から、エチオピアが1936年からであった。これらのアフリカ植民地の中で、リビアの再征服が自由主義政府からファシスト政権にまたがって1922-31年に行われたが、これは伝統的な型の植民地戦争と位置づけられている⁽¹⁾。ファシズム体制による初めての本格的な植民地拡大の戦争はエチオピア戦争であり、これがその後の継続的な戦争政策と体制崩壊の端緒となったということについて、多くの研究者は一致している。エチオピア戦争は1935年10月に開始され、「イタリア帝国」の樹立宣言が1936年5月であり、1941年にはイギリス・エチオピア連合軍に敗れて、エチオピアから撤退しているので、その「帝国」はわずか5年の命であった。

イタリア・ファシズム研究の大家R・デ・フェリーチェは、1929年から1936年の時期、すなわち1929年のカトリック教会との政教協定、その年の人民投票（ファシスト党候補者リストへの賛否を問う下院議員選挙）から始まり、このエチオピア戦争とその併合による「帝国」樹立の時代をファシズム体制へのイタリア国民の「同意の歳月」と規定した。その理由は、カトリック教会のファシスト体制支持の表明、人民投票での99%以上の支持、1935年10月のエチオピア戦争開始から1936年5月の「帝国」樹立宣言集会の状況に体制への全体主義型の「熱狂的な支持」の頂点が現れていると考えたからであった。

集会・言論・結社の自由を抑圧した強権的な体制下での「同意」を主張

するデ・フェリーチェのこの「同意」論は、イタリアの歴史学界で激しい反発と反響を喚起し、「同意」の内容や質についての議論と批判が展開された。これに対して、デ・フェリーチェは、1981年に刊行された続巻で第2章を「1936年から1940年までの同意」とし、先の「同意」の時期は抑圧面が強く、労働者や農民のストライキや騒擾行動もあった「消極的同意」(consenso passivo)とも言えるが、1936-40年は「能動的同意」(consenso attivo)もそれなりに存在したとし、改めて両方の時期を「同意の時代」と呼んでいる⁽²⁾。

本稿は、まず第一にムッソリーニのエチオピア戦争と「帝国」建設の目的・意図を明らかにすること、第二にこの「帝国」建設期のイタリア国民の「世論」「意識」の検証を通じて、エチオピア戦争と「帝国」樹立の時期に本当に「同意」が存在したと言えるのかを再検討し、そのうえでファシズム体制の「同意」と「不同意」の状況とその特徴、その帰結を明らかにすることを目的としている。

第1章 エチオピア戦争と「帝国」へのムッソリーニの執念

第1節 「威信」のための戦争

ムッソリーニとファシスト体制の指導者たちのエチオピア戦争・征服の政策決定過程については、石田憲の詳細な研究によってすでに明らかになっている。石田憲は、経済的・資源的にメリットのないエチオピアへの侵略の動機を主として「ファシスト・イデオロギー」に求めている⁽³⁾。本稿ではこの見方を共有しつつも、ファシスト・イデオロギーに由来する面とともに、さらにムッソリーニとファシスト指導者たちの「威信」、つまりイタリア・ファシズムの「偉大さ」の探求が重要な動機であったことを示すつもりである⁽⁴⁾。

1896年にイタリアがエチオピアに「アドゥア」の闘いで敗北したという

歴史的な事実は、イタリアのナショナリストにとってはいつの日か晴らすべき「恥辱」であった。彼らの認識においては、「ヨーロッパ文明」発祥の国であり、先進国・「優れた国」・強国であるはずのイタリアが、アフリカの「奴隷制」の「野蛮な」「未開の国」に軍事的に敗北したという事実は、受け入れがたいものであった。それは、ファシストにとってもそうであった。

イタリア・ファシズムは歴史の舞台に登場して以来、ムッソリーニの口癖であった「より偉大なイタリア」を希求してきたのであり、その具体的な形として「帝国」を目指してきた。しかし、「帝国」の実現は、ヨーロッパのいずれかの強国との戦争を行わない限り不可能であり、第1次世界大戦後の平和を望む国際世論のもとでは、どこの国に対してであれ公然と「戦争」を主張することは不可能であった。また、どの国との戦争によって帝国を建設するのかという点についても、大国ではないイタリアにとってはヨーロッパでの道は閉ざされ、バルカンは難しく、地中海は無理であった。つまり、具体的にどこに「帝国」を築くのかと問えば、答えは明確ではなかった。また、何のための帝国建設かという目的も明確に定められていなかった。つまり、ある意味で1930年代半ばまでは「帝国」はファシズムの単なるスローガンに過ぎなかった⁽⁵⁾。実際、1932年6月に刊行されたドイツのジャーナリストE. ルードヴィッヒ『ムッソリーニとの対話』の中で（インタビューは1932年3～4月に行われた）、ムッソリーニはナポレオンやシーザーを賞賛し、帝国と帝国主義を肯定する発言をしているが、帝国の建設について具体的な言及はしていない⁽⁶⁾。

植民地獲得と経営において重要な資源や土地・生産能力に関しても、リビア、エリトリア、ソマリアなどのアフリカ植民地について、イタリアはその支配から数十年間経ってもまともな調査をしてこなかった。ある意味で、そのような重要資源は存在しない地域と初めから諦めており、また知りたいという意欲も調査能力・資金もなかったと考えられる。これはエチ

オビアに関しても同じであり、まともな経済・資源分析は戦争開始前にさえ行われておらず、旧約聖書のシバ女王の伝説や古代ローマの博物学者プリニウスの『博物誌』によってその富の評価と宣伝が行われていたほどの悲惨なレベルであった⁽⁷⁾。

このような中でムッソリーニが「帝国」実現の手段として、エチオピア侵略戦争を具体的に検討し始めるのは1932年である。この年の2月にファシスト四天王の一人であるデ・ボーノをエリトリアに派遣し、エチオピアの情勢を探らせている。32年3月に出されたデ・ボーノの報告書をムッソリーニはしばらく棚ざらしにしていたが、この年の7月以後の新たな政治情勢の中でデ・ボーノにエチオピア侵攻作戦計画を検討させた。デ・ボーノは11月にこれを提出した⁽⁸⁾。

ではなぜ、ムッソリーニはこの年にエチオピア侵略の検討に着手したのであろうか。1932年は、ムッソリーニとファシスト体制にとってはローマ進軍10周年の記念すべき年であり、10月からローマで「ファシスト革命10周年」展覧会を開催し、ローマ見物と一体の形で全国からこの展覧会への国民動員を行っていた。だが、興味深いのは、この大々的な展覧会の内容である。そこでは展示の内容のほとんどがローマ進軍以前のファシストの活動とローマ進軍に至る過程であり、その後の10年間のファシスト・ムッソリーニ政権の「成果」の展示がきわめて少なかった。

各部屋の展示は以下のとおりの構成であった。1階の展示室はAからUまで18室で、展示室A「ヨーロッパ戦争の勃発から『ボーボロ・ディタリア』設立まで（1914年）」、展示室B「革命行動ファッシ設立からイタリアの参戦まで（1915年）」、展示室C「イタリアの戦争（1915-1918年）」、展示室D「イタリアの勝利（1918年）」、展示室E「勝利からイタリア戦闘ファッシの設立まで（1918年11月4日-1919年3月23日）」、展示室F「イタリア戦闘ファッシの設立から1919年6月まで」、展示室G「1919年後半」、展示室H「1920年前半」、展示室I「1920年後半」、展示室L「フィウメと

ダルマツィア」、展示室M「フィウメとダルマツィア」、展示室N「1921年」、展示室O「1922年10月まで」、展示室P「ナポリ大会とローマ進軍」、展示室Q「ローマ進軍」、展示室R「栄誉の広間」、展示室S「ファッシンの回廊」、展示室T「ドゥーチェの記録室」、展示室U「殉教者の記念室」、上階の展示室I「外国におけるイタリア人ファッシ」、展示室II「精神—ファシスト書誌」、展示室III「ファシスト組合総連合—貯蓄」、展示室IV「土地—交通」、展示室V「労働」であった⁽⁹⁾。

つまり、この展覧会ではファシスト政権の10年間の「成果」の展示は上階の展示室IIIとVIの2室だけであり、ローマ進軍に至る過程が中心であった。それは、ある意味で「革命」は「過去のもの」、ローマ進軍で「ファシスト革命」は終わり、革命は展示場に神聖なものとして安置されるものであることを示していると言える。また、この展覧会のファシスト党の公式ガイドブックが説明しているように、ファシスト「体制」の経済的・産業的な「成果」はまだ具体的に見える形では現れておらず、目標が示されているにすぎないからでもあった⁽¹⁰⁾。

むろん、この展示の意図は、ローマ進軍に至るファシズムの歩みを広く国民に宣伝することであったとしても、ファシスト体制の業績の宣伝が中心ではないことに違和感を感じざるをえない。実はファシスト「体制」の成果は、1932年10月の10周年記念日に合わせて展示場の外で土木・建造物・建設事業として大々的に示された。コロッセオからヴェネツィア広場までの「帝国の道」（現在の名称は「諸皇帝の広場の通り」、Via dei fori imperiali）、フォーロ・ムッソリーニ（ローマ市内北地区、現在のオリピックス・スタジアムに隣接）、モンフェラートの水道、トリノ・ミラノ間及びトリエステ・フィウメ間の高速道路、ヴェネツィアの潟の橋竣工などがそれであった。このように別の形でファシスト体制の10年間の具体的な成果、イタリアの「偉大さ」のへのファシズムの成果を示されていた⁽¹¹⁾。

また、「ファシスト革命10周年展覧会」や記念式典に合わせて、第1回

農業機械全国博覧会、第1回干拓・国内移民博覧会、M. ビアンキ（1930年2月に死亡したファシスト四天王の一人）像の除幕式などローマでの様々な催しや全国各地での式典が開催された⁽¹²⁾。

しかし、1929年秋から始まった世界恐慌はイタリアでは1931年以降に深刻化し、1932年時点では倒産と失業がまだまだ増大していた。例えば、工業分野の就業者比率は、1926年9月を100とすると、29年12月は95.7%、30年12月に84.9%、31年12月74.2%、32年12月は68.7%、33年10月は69.9%であった⁽¹³⁾。国民の政府への不満が高まり、全国各地でストやデモ、パン屋の襲撃事件、仕事を要求しての役所への押しかけ、暴動などの騒擾事件が起こっていた。これに対して警察力で、そして時には軍隊まで出動して鎮圧したが、それは問題の解決ではなかった⁽¹⁴⁾。

国民は経済恐慌下で困難にあえぎ、生きることに精一杯であり、ファシスト党や体制に対するアパシー、諦め、無関心、無気力が広がっていた。地方党组织は内紛と権力・利権争いに明け暮れ、人々はファシスト党を見放し、ファシスト党や関連組織が党と体制の諸活動への「参加」を促すためのメッセージを伝導することがきわめて困難になっていた⁽¹⁵⁾。それゆえ、体制の存続のためには、ファシスト党と大衆を活性化することが必要であった。これに取り組んだのが1931年12月に書記長に就任したスタラーチェである。

スタラーチェは（1931年12月8日～1939年10月31日、書記長在任）、この目的のために宣伝に力を注ぐとともに、党活動と国民生活の「ファシスト・スタイル」の確立を推進した。また、ムッソリーニとスタラーチェは、ローマ進軍（「ファシスト革命」）10周年を記念して、1927年以来いわゆる「レーヴァ・ファシスタ」というファシスト青年組織を経た者以外に認めてこなかったファシスト党への加入を、それ以外の者にも認めた（1932年11月5日～1933年8月1日）。また、すべての国家公務員、教師、警察官、軍将校に入党を義務づけた。1920年代後半から進められてきた国家権力の

ファシズム化とともに、その担い手と遂行者をファシズム化することが狙いであった。その結果、党員数は1932年10月の約100万人から、1933年10月に約142万人、1934年10月に185万人と約1.8倍になった。この時以後の入党者は、古参党員から「家族のためのファシスト」(Per necessità familiare = PNF、PNF = partito nazionale fascista 国民ファシスト党をもじったもの)や「パンのためのファシスト」と呼ばれた⁽¹⁶⁾。

ファシスト党員は、その後も機会ある度に拡大された。1936年11月(?)にエチオピア戦争志願兵に入党を認め、1940年には第二次大戦への参戦に伴って兵役に就いた者全員に入党が認められ、党歴を1925年1月3日からとする特典も付けられた。その結果、党員数は、1938年10月に243万人、1943年には477万人になった⁽¹⁷⁾。

しかし、本人の思想と活動歴を問わないこのような野放図な党員の拡大は、他方で進行していたムッソリーニの個人独裁化、個人崇拜と絶対化と相まって、ファシスト党を弱体化し、活力を低下させて行った。スタラーチェによる「ファシスト・スタイル」の強制は、党の活動を形式化し、儀礼化していった。(ムッソリーニを)「信じ、従い、戦う」(credere obbedire combattere)というスローガンは端的にそれを表している(このスローガンは、30年代前半から党の合言葉になり、1938年の党規約4条に明記されるに至った)⁽¹⁸⁾。ファシスト党は「非政治化」「官僚機構化」して行った。ムッソリーニ自身もこれに気づき、1934年には党の形式化の行き過ぎと活力低下に何度か警告を発していたが⁽¹⁹⁾、個人崇拜に惑溺し、スタラーチェのやり方を変えさせることはなかった。

ドーボラヴォーロや女性ファッシ、ファシスト学生団など多数のファシスト党付属組織が次々と創設されたが、国民の多数はファシズムを熱心に支持したからではなく、「生活のために」不承不承、それらに参加していたのが実情であった⁽²⁰⁾。

このような状況下で、ファシスト体制は失業問題の実際の改善、ファシ

ズム体制の偉大さと「威信」を国民に具体的に示す必要があった。その対象に選ばれたのがエチオピア侵略と「帝国」の樹立であった。したがって、この侵略と「帝国」樹立計画には戦略的な経済目的、軍事目的は存在しなかった。天然資源は特に何も見込まれず、アフリカ植民地経営としても軍事基地としても無意味なエチオピアを征服するための戦争は、このような動機から開始された⁽²¹⁾。すなわち、ファシスト党とファシスト体制を再活性化し、「ファシスト的人間像」を具体的に提示するためには、この戦争を「ファシストの戦争」とすること、そして、それを通じて「全国民の戦争」にする必要があり、そのためにこそ「ファシスト義勇軍」が派遣される必要があったのである。ファシスト大評議会は1935年2月16日の会議でエチオピアに派遣するファシスト義勇軍の募集を決定し、5月以降続々と派遣していく⁽²²⁾。

第2節 戦争準備

ムッソリーニがエチオピア戦争の実行準備の具体的な指示を出したのは、1934年12月5日のイタリア領ソマリアとエチオピアとの国境地域のワルワルで生じた軍事衝突事件から約3週間後の12月30日である。「イタリアーエチオピア問題の解決のための指示と行動計画」と題された覚書では、以下のような指示とヨーロッパ情勢判断が示されていた。

1. 「イタリアーエチオピア関係の問題が外交問題から軍事問題に移行した。」「『歴史的な』問題を解決する唯一の手段は武力である。」
3. 「エチオピア軍は軍権力の集権化とともに、軍組織及び兵器についてヨーロッパ型の軍隊への変革を進めている。」
5. 「問題解決が遅れれば、任務が困難になり、犠牲が増える」
6. 「この戦争の目的はエチオピアの軍事力の破壊、エチオピアの完全な征服である。帝国は他の方法では実現しない」。
8. 「我々の行動の本質的な条件は、1935-1936年と1936-1937年の2年間

はヨーロッパが平穏なこと」「ここ数年間はヨーロッパ戦争が避けられるであろうと予想している。」「伊仏の合意の存在はドイツのオーストリアへの新たな攻撃を遅らせるであろう。」「ドイツの軍備強化には時間がかかるであろう。」「ドイツはしばらくは平和政策をとるであろう。」

9. 「我が軍の勝利が迅速で決定的であるためには、我々が保有し、エチオピア人が量的にまだ保有しないほどの大規模な機械化手段の投入が必要である。」

10. 「実践的で決定的な戦争のために、巨大な戦争手段が準備されなければならない。」「6万人の現地人部隊、少なくとも同数のイタリア本国からの派遣軍、エリトリアに戦車150輛、ソマリアに戦車50輛、大砲とガスの絶対的な優越性、豊富な弾薬」「本国からの6万人の兵は——10万人の方がより良い——1935年10月までにエリトリアに用意されなければならない。その間に十分な期間の教育を受けたすべての現地人を軍に徴兵しなければならない。彼らは1935年9月～10月には動員できるであろう。」「我々の行動が迅速であればあるほど、外交的紛糾はより小さいであろう。」「日本以上に、公式の宣戦布告は必要ないであろう。とにかく、行動の純粹に防衛的性格を主張する。」「軍事行動が急速に既成事実を作れば、ヨーロッパで困難は生じないであろう。」「英仏はエチオピアに関してイタリアと合意できる唯一の国である。」「国際連盟の妨害はこの企てを完遂することを妨げないであろう。」

11. 「[エチオピア] 帝国の分断と弱体化のために、エチオピア内でも政治活動を行う必要がある。あらゆる手段で不満を持っていると思われる[部族の] ボスたちの[皇帝との] 対立を喚起する。」「我々の軍事的な準備が壮大であればあるほど、エチオピアの弱小な周辺のボスたちの間での皇帝との離間工作は容易になるであろう。」「我々の手段の巨大さはエリトリア人たちの忠誠心にも効果的であろう。我々の準備はエリトリア人の中に何者も我々に抵抗できないとの確信を引き起こすに違いない。そして、国境

の向こうのエチオピア人に「皇帝の力への」疑念と不安を喚起するであろう。」

12. 「『戦争の』準備がほぼ完成するのが1935年秋なので、政治は戦争を早めるような事件を起こさないようにしなければならない。」

14. 「国内の観点からは何の心配もない。ファシスト大衆の間には、衝突が避けられず、遅かれ早かれ軍事行動になるであろうとの確信が広がっている。青年大衆の間では、『トーン』はますます高まっている。古い世界の生き残りの人々は『冒険』を恐れている。エチオピアはヨーロッパ人の主人を持たないアフリカの最後の辺境である。イタリアーエチオピア関係のゴルディオスの結び目[=難題]はますますもつれてきた。遅くなる前に、これを断ち切る必要がある！」⁽²³⁾ ([] 内は筆者の補足)

つまり、ヨーロッパ情勢に関しては、数年間の平穩、ドイツの軍事力強化の遅さとオーストリアへの介入の停止、イタリアのエチオピア侵略に対する英仏の黙認が前提であった。また、エチオピアが軍事力を強化する前に、そしてエリトリア人やエチオピア人を精神的にも屈服させ、従わせるために圧倒的な軍事力で短期間に勝利することが必要であると、ムッソリーニや体制の対外政策決定者たちは認識していたのである。それゆえ、近代兵器に乏しく、近代的な軍事組織ではないエチオピア軍と皇帝を支持するラスの部族兵（合計35万人ともいわれるが、正確な数字は不明）に対して、イタリアは大量の兵と武器、そして毒ガスを使用した戦争を展開したのである。また、イタリアも加入していた毒ガス禁止条約を無視して、当初から毒ガス使用を計画していたこともこの文書から分かる（第10項）。また、軍事行動が防衛的性格であるから宣戦布告が不要と主張する根拠に、日本の行動を挙げており、彼らが満州事変以後の日本の軍事行動とその口実、それへの国際社会の融和的な対応に注目し、既成事実化によって国際社会の反発を乗り越えることができると見ていたことが分かる（第10項）。

しかし、上記の前提と見込みの多くは外れることになる。英仏との合意

は最終的には成立せず、国際連盟決議による経済制裁をイタリアは受けることになった。経済制裁に反対したのは、独裁体制の国家でイタリアと関係の深かったオーストリア、ハンガリー、アルバニアの3ヶ国だけであった（英仏をはじめ、51ヶ国が賛成）⁽²⁴⁾。大国による国際政治の管理と植民地拡大の相互承認の時代は終わろうとしていた。また、予想に反してエチオピア現地人の抵抗は根強く、1936年5月のアジスアベバ入場、「帝国」樹立宣言後も、イタリア軍は長期にわたってゲリラとの消耗戦を強いられることになった。

第3節 エチオピア戦争への動員と費用

ムッソリーニは、1935年7月にフランスの『エコ・ドゥ・パリ』紙の特派員のインタビューで、「ファシスト・イタリアのアフリカについての目的」について、以下のように答えている。

「エチオピアに関しては、数世紀に渡ってヨーロッパの偉大さを形成している植民地化の使命を、ヨーロッパが今なお遂行する資格があるかどうかを認識することが先決問題である。……もしその能力がないなら、ヨーロッパの衰退は取り返しがつかなくなるであろう。」「この証明を行うために、国際連盟は設立されたのであろうか。それは、黒人（neguri）、未開の国の人民、世界の野蛮人たちが、人間性を革命し、変革した偉大な諸国民を引きずり出す法廷なのか。それは、ヨーロッパが数の法律の下に屈し、ヨーロッパの衰退を宣言するのを見る議会なのか。」「偉大なイギリス人は帝国を作り上げ、フランス人は偉大な植民地建設者であった。……私もイタリアについて同様に考えている。」

記者は、ムッソリーニがローマを、ソマリア、エリトリア、エチオピア、リビア、東地中海の島々などを合わせた帝国にすることを欲していると判断した。さらに、イタリア人を移住させるためにエチオピア高原を欲しているとも見て取った。

記者の「エチオピアにイタリアが専念したら、ヨーロッパで何が起こるか心配ではないか」という質問に対して、ムッソリーニは「ヨーロッパは後2～3年は平穏であろう。」と答えた。「イタリア外交にとってオーストリアは優先要素と考え続けるのか」との質問に対しては、「そうだ」「8月末には北イタリアで50万人の大演習を行う。10月までには100万人のイタリア人が兵役に就いているであろう。」と空言を吐いている。「このエチオピアは貴方の、貴方だけの関心事と言われている。国民は貴方についてくるのか。」という問いに対して、「国民のほとんどは、私が欲するものを、そして、なぜ私がそれを欲するのかを理解してきた。国民は努力する。その結果、世界で偉大な地位を得るであろう。」と答えた⁽²⁵⁾。

ここから、ムッソリーニの国際情勢が上述の指示文書（覚書）の1934年12月時点とほぼ同じであること、植民地主義をヨーロッパの栄光・使命であり、当然と考えていること、英仏と同様の「帝国」と「巨大植民地」への強烈な欲求、国民と自分自身との一体視の昂進、大言壮語と虚言癖の悪化などが確認できる。このムッソリーニ自身の認識からも確認されるように、イタリアのエチオピア侵略戦争は、ヨーロッパ帝国主義諸国にとっては古典的な植民地戦争の最後であり、同時に最初のファシストの戦争と言われている⁽²⁶⁾。

1935年10月に開始されたエチオピア戦争は、ドイツにおけるヒトラー政権の成立（1933年1月）とそのヴェルサイユ体制の破壊をめざす一連の行動によるヨーロッパ政治の急速な流動化の中で準備され、展開された。すなわち、国際連盟からのドイツの脱退（1933年10月）、ヒトラーの意を受けたオーストリア・ナチスによるウィーンでのクーデタの試み（失敗）とドルフス首相暗殺、ドイツの再軍備宣言（1935年3月）とラインラント進駐（1936年1月）など、次々と新たな事態が起こっていた。ムッソリーニは、ヒトラー・ドイツの台頭とそのオーストリア支配を警戒しつつ、同時にイギリスによる本国艦隊の地中海派遣という牽制と軍事的な緊張の高まりの

下で、国際連盟による経済制裁を可能ならば回避し、最悪の場合でもその打撃の深刻化の前にエチオピアを征服し、戦争を終わらせる必要があった。

このためにも、前節で検討した1934年12月のムッソリーニの覚書に示されたように、最初から大量の兵士と武器が動員された。エリトリアからはデ・ボーノ将軍が率いる約10万人のイタリア人部隊が、約5万人のアスカリ兵と共にエチオピア北部国境を越えて侵攻した(35年11月にデ・ボーノは最高司令官を解任され、後任にはバドリオ参謀総長が就任した)。イタリア軍の進撃が停滞した1936年1月には、グラツィアーニ将軍が率いる7万人の部隊が南のソマリアからムッソリーニの承認の下、侵攻を開始した。この南北からの攻勢によって、首都アジスアベバが陥落し、1936年5月5日にバドリオ元帥が入場し、5月9日にローマでムッソリーニが勝利と「帝国」の樹立を宣言した⁽²⁷⁾。

ここで、投入されたイタリア軍の兵力と装備について見ておこう。アジスアベバでの帝国樹立宣言直後の1936年6月1日時点で、イタリア領東アフリカには正規軍8個師団、ファシスト義勇軍(milizia)6個師団がおり、将校1万5千人、兵士31万6千人、約10万人の軍属の労働者、エリトリアから動員されたアスカリ兵約8万7千人が存在した。軍の装備は42万丁の小銃とマスケット銃、1万丁の軽機関銃と重機関銃、1,123門の大砲、1,600台の無線機、約9万頭の馬、1万6千台の様々な車両(うち2,100台がトラック)が動員された。当時のイタリア国内で使用されていたトラックの総台数が約1万3千台であったことから考えれば、広大なエチオピアでの戦争にいかにか大量の物資を動員したかが分かる。その意味で、この戦争は数百キロメートルの道路の早急な建設や莫大な量の兵站を必要とするイタリアが初めて経験した現代的な物量戦争であった。道路等の建設に必要な材料は、エリトリアやソマリア等のイタリアの既存の近隣の植民地では生産されていないために、木材やセメント等を本国からエリトリアに運搬しなければならなかった。航空機は450機が派遣され、6箇所の大きな航

空基地と18箇所の小基地、64箇所の航空機用臨時施設が建設された)⁽²⁸⁾。帝国樹立を宣言した36年5月時点では、イタリアの占領地域はエチオピア全土の約3分の1であり、大部分の地域ではその後2年あまり、エチオピアのラス（部族指導者）らが率いるゲリラとの戦闘が継続した⁽²⁹⁾。

このような膨大な人員と物量を投入した戦争によって、軍事費は急速に膨張した。1935-36年の陸軍省の支出は予算比の2倍であり、スペイン内戦干渉を開始した1936-37年は、予算の3倍の支出であった。空軍も1936-37年は予算額の2.8倍の支出であった。いったん戦争を始めると、軍事費に関しては予算の枠は意味をなさなくなったのである。1934-35年度の軍事費は、陸軍30.6億リラ、海軍13.6億リラ、空軍9億リラ、合計53億リラであり、国家予算の約20%を占めた。その後、エチオピア戦争とスペイン干渉戦争の結果、実際の国家支出は予算を大幅に超過することになり、1935-39年の4年間の実質支出の合計は1,630億リラで、1931-35年の4年間の合計1,010億リラの1.6倍へと膨張した（年平均では、250億リラから、408億リラへの増加）。特に、1935-36年は669億リラと前年度（218億リラ）の3倍強へと膨れあがった⁽³⁰⁾。

1969年の会計検査院の調査報告によると、1923-34年の11年間の植民地関係支出が60.5億リラ（年平均5.5億リラ）であったのに対して、1935-40年の5年間はエチオピアの支出だけで573億リラ（年平均115億リラ、別の計算によると5年間で753億リラ、年平均150億リラ、国家予算の約4割）と少なく見積もっても約10倍に達している。この支出には東アフリカでの道路や建築、都市計画などの公共事業も含まれているが、3軍の軍事費総額の約2倍をエチオピア関係の費用に使っていたのである。これらの費用の約80%は国内で販売された国債で調達され、それは猛烈なインフレーションをもたらし⁽³¹⁾。しかし、賃金は抑えられたので、実質賃金は大幅に低下し、多くの国民の生活は大きな困難に陥った⁽³²⁾。

イタリアはエチオピア戦争とスペイン干渉戦争に膨大な費用をかけたた

めに、軍の装備の近代化・更新に費用をかけることができなかった。そのために、1940年6月に第二次世界大戦に参戦した時の主要装備は第一次世界大戦時の旧式兵器が中心であった。大砲や車両も大幅に不足しており、参戦直前にドイツに大砲や車両の供給を求めるような状態であった。

第2章 エチオピア戦争に対するイタリア世論

第1節 ファシスト独裁体制下の「世論」

このような莫大な費用をかけた戦争に対して、イタリア国民はどのように考えていたのであろうか。ファシスト独裁体制下では結社の自由や言論の自由がなく、ましてや世論調査が行われるわけでもないので、国民の考えや意見、いわゆる「世論」を正確に知ることはできない。しかし、ここで言う「世論」を普通の人々（gente comune）の「感情」に限定するならば、その動向把握は困難ではあるが、まったく不可能というわけでもない。これまでのファシズム研究において、主として警察当局やファシスト党のスパイの報告に基づきつつ、反ファシズム勢力その他の情報をも参照し、それらの情報の真偽を検証することによって「世論」「感情」の研究が進められてきた。これらのスパイや公安当局の報告は、ファシスト体制に対する人々の行動や、パル、電車内、市場や通りで彼らが聞いた話を集めたものである。もちろん、その報告内容にはバイアスがかかっており、そのまますべてを信用することはできない。しかし、スパイの報告内容が体制を賛美する民衆の意見ではなく、体制への批判的な声を伝えているときには、それはかなりの部分真実と見て良いであろう。というのは、批判的な声を過大に報告する必要はスパイにはないからである。実際、エチオピア戦争のような体制にとっての重要問題については、全国各地から政府の政策への賛美とともに批判的な意見や支持の留保が報告されていた⁽³³⁾。

独裁体制において国民の意見が体制の政策に大きな影響を与えることは

ないが、戦争という国民の動員と強い支持を必要とした1935-36年のような時期には、体制にとっては国民の意見はきわめて重要であった。それゆえ、スパイたちにも国民の声のできるだけ正確な収集に努めることが要求された。

ところで、体制が宣伝したエチオピア戦争を正当化するための理由には、「文明化の使命」「人口膨張」「陽の当たる場所の必要」「他の強国と平等な扱いの権利」など様々な理由が挙げられていた。しかし、これらの多くは国民をあまり納得させるものではなかった。しかし、体制にとっては、理屈づけはともかく、この戦争を「イタリア国民の戦争」「国民が望んでいる戦争」にしなければならなかった。とりわけ、外国の観察者にイタリア国民が熱狂的にこの戦争を支持しているという印象を与えることがムッソリーニにとっては、至上命題であった。そのためには、イタリア国民に戦争の理由の正しさを確信させること、国民を熱狂的に戦争に参加させることが必要であり、熱狂的な参加を創り出せないときには、その参加が熱狂的と外見的に思わせることが不可欠であった。それには、警察やファシスト党による抑圧や監視・スパイだけでなく、宣伝が重要であった。体制は1934年末以来、エチオピアに関する大々的な宣伝戦を展開し始め、1935年6月に新聞・宣伝省を設置し、ムッソリーニの娘婿G. チャーノが大臣に就任した⁽³⁴⁾。

第2節 エチオピア戦争に対する民衆の声

エチオピア戦争に対しては、その準備段階からイタリア国民と体制との間にはかなり大きな亀裂が存在していた。戦争開始前の1935年前半の政府による大々的な宣伝にもかかわらず、国民は戦争に進むことを歓迎していなかった。見も知らない遠いアフリカの「エチオピアの後進性」=「奴隷制の国」を「文明化する使命」などの政府の好戦的な態度を正当化する説明は、見え透いた作り事で無意味であり、国民の関心と呼ばず、国民を納得

させるものではなかった。

1935年6月20日に警察副長官 C. セニーゼはスパイの様々な報告を以下のように整理し、宣伝・出版省次官に迅速な行動を促がしていた。「不安と失望が広がっている。……何かを得ることができるのではと信じ、期待する人もいるがそれは例外である。一般に、世論は現在の状況では政府を支持していない。イタリアは征服戦争のための軍隊派遣を行っており、ファシズムの新聞が伝える外国からの批判が正しいと国民が考える傾向にあるというのが明白な印象である。……。要するに、政府の現在の態度をもたらした根本的な大義の理解が大衆にまったく欠けている。……。エチオピアの挑発を語ることは大衆からは幼稚な口実で、戦争を正当化するには不十分と受け止められている。200万人の奴隷の将来の解放の強調は、その具体的な計画が立てられていない段階では、……それ自身何の意味もない。結論的には、軍事占領とエチオピアの保護国化をしなければならないことを国民に公然と表明し、それによって我々とエチオピア人が得ることのできる巨大な利益を示すべきである。」と述べている⁽³⁵⁾。つまり、世界恐慌の中で大不況と失業とインフレに苦しむイタリア国民にとっては、きれいなうたい文句よりも、現実的な利益、苦境脱出のチャンスが示されることが重要であると、このセニーゼは考えていた。

しかし、エチオピアの征服がイタリアにもたらす富についても国民は疑問を抱いていた。例えば、ある町では、「もし、エチオピアに多くの有用な物があるのなら、今まで各国が、とりわけイギリスがそれを奪っていたであろうと思わないか?」と話して逮捕された者がいた(1936年4月16日、内務省への報告)⁽³⁶⁾。また、一定の人々はこの戦争が侵略であり、征服戦争であると考えていた。ボローニャでは「わが国の政府は軍事力を誇示するために植民地戦争に突っ走っている」と話して、逮捕された者がいた(1936年2月6日、内務省報告)⁽³⁷⁾。

1935年6月にエリトリアのマサワから帰ってきてボローニャ駅にいた病

気の労働者たちが、旅行者たちに与えた悲惨な様子と会話が報告されている。「ほこりだらけで靴もなく、ぼろを着た労働者たちは、……アフリカであった無秩序と搾取の悲惨な状況を他の旅行者たちに語った。そこでは、仕事の請負人によってあらゆる形の収奪や虐待にさらされた。栄養失調、彼らに配られた水をまきあげられ、非常食や食糧などを法外な値段で買わされた。」⁽³⁸⁾

ちまたでは、「国内でやるべきことがたくさんある時に、なぜ外国で多くの金を使うのか」という声があった⁽³⁹⁾。カルロ・レーヴィは流刑先の南部の寒村の農民に「ローマの奴らに戦争するだけの金があるなら、なにはさておき4年も前に崩れ落ちたアグリ河の橋を何故かけてはくれないのか?……。土地ならここでも充分だ。ただそれを利用する設備がないだけなのだ」と語らしている。また、1935年10月2日の村の広場での集会に農民たちも動員されたが、彼らは冷ややかに見ているだけであったと描写している。この点は他の町についての警察のスパイの報告と共通している⁽⁴⁰⁾。

1935年夏のイタリア経済は改善されつつあったが、重大な危機状況をまだ脱していなかった。1934年の各産業部門の生産額は、1929年比で機械71.8%、金属71.6%、繊維79%、化学114.8%、鉱業84.8%、建設104.3%であった。実質賃金は1935年がマイナス5%、1936年がマイナス7.9%であり、1935年の輸出入は1929年の約半分であった⁽⁴¹⁾。

1935年に入り政府の宣伝の重点は、エチオピアで得られる富の宣伝から、「イタリアの権利」、イタリアが国際的なレベルで適切に処遇されていないというイタリアが受けている「不正義」の主張に重点を移した。このナショナリズムへの訴えは、1896年の「アドアの屈辱」の記憶の喚起とともに、国民や青年の間に一定の効果と「同意」をもたらしたと言われる。しかし、先に見たムッソリーニの1934年12月30日覚書とは逆に、青年の中の冷ややかな反応も報告されている。それを示すのは、召集を免れることを

期待しての大学に登録する学生数の急増である。大学生の登録者数は1934年の約6.2万人から1936年には7.2万人へと15%増加した。また、1939年に8.6万人、1940年に12.7万人、1942年には14.8万人になり、1942年は1939年と比べて約2倍に急増している。その理由は、大学生は26歳まで徴兵猶予が認められていたからである。つまり、一方にファシスト学生団の一部の熱狂、他方で冷ややかな反応と召集免れが存在していたのである⁽⁴²⁾。

第3節 エチオピア戦争支持の全国民大集会の実態

ファシスト体制及びエチオピア戦争への広範な国民の支持・同意の証拠として、よく挙げられるのは、1935年10月2日の大集会である。ムッソリーニと体制指導者は、国民動員という国内的な目的だけでなく、イタリア国民の統一・挙国一致を世界に示す場にするをこの集会の大きな目的にしていた。この大集会は全国津々浦々の町の広場でムッソリーニのエチオピア戦争開始を告げるラジオ演説を聴くために開催され、全国で2,000万人が参加したとされる（全人口4,600万人の43.5%！）。体制は、参加者数、全国レベルの「全体主義的な」（全国的な）参加、人々の「自発的な熱狂」を強調して、この集会を大成功と評価した。体制への「熱狂的支持」という体制によって作られたこのイメージがその後、映画ニュースの宣伝もあり、国外に亡命していた当時の反ファシズム勢力にも受け入れられていった。しかし、詳細に検討してみると、広場にきた人々は自発的というよりも、不参加の党员や国民に対するファシスト党の懲罰の脅しの下で参加したというのが実態であった。

ファシスト党は集会の成功に向けて、1935年9月10日に動員の詳細な指示を発していた。すべての町の地区グループの責任者は、全党员に「召集令状」（参加指令の葉書）を出すこと、その葉書には集会参加の義務、不参加の場合の制裁（罰金、規律違反措置、重大な懲罰）、党员番号を明記するよう指示されていた。また、ファシスト党だけでなく、ファシスト組

合やドーボラヴォーロの会員などのファシスト党関係組織でも同様の参加の強制が行われた。集会が開催される各地の広場の入り口には、ファシスト党の事務の机が置かれ、そこに各自が葉書を提出しなければならないと手続きが定められていた。そして、各地の党組織はこの葉書を集めて、集会後に参加者の名前のリストを作成することとされていた⁽⁴³⁾。

それゆえ、人々は、参加者としてリストに記録してもらうために広場に設けられた机に必死の思いで殺到することになった。警察の各部署でさえ、勤務のために集会に参加できない者のリストを9月下旬に作成し、党に承認を求めなければならなかった。ミラノでは参加証明のために会場のスフォルツァ城広場に入ろうと押し寄せた群衆が入り口で押し合いへし合いし、葉書を集めている机の前に来ようと争った。職員が混乱に驚いて葉書集めの作業を中断すると、強い抗議の声が上がった。ローマでは、諸事情から会場のヴェネツィア広場入り口に葉書受け取りの机を設けるのを関係者が忘れたが、人々は党の指示通りに葉書を渡すことができなかったので、大いに不安に駆られたと報告されている⁽⁴⁴⁾。

外国人ジャーナリストはこの集会参加の強制性に気づいていた。『ニューヨーク・サン』の記者は、「確かに、集会はきわめてよく準備されており、強制的な性格を持っていた。しかし、それは本物の集会であったのか？……公然と意見を表明できない全体主義体制の下では、イタリア国民の歴史的な集会に対しても、中立的な観察者は大いに疑問を呈せざるをえない。」と述べていた。イギリスの別のジャーナリストは、イタリア人を「熱狂を強制された囚人たる国民」と表していた。つまり、ここに存在するのは「強制された同意」であった。ファシストの中にもこの強制的な集会に真に自発性があるのかという疑問を呈する人もいた。ある陸軍少佐は、「自発性のない、手はずを整えた強制的なものは、意味も価値もない。外国ではファシストのこれらの集会のメカニズムは完全に知られており、いさかかも確信や強い印象を彼らに与えることはできない。」と述べてい

た⁽⁴⁵⁾。

広場に集まった人々の反応についても同様な観察がある。広場に群衆が集まっていなくても、その雰囲気は熱狂的ではなかったのであり、スパイの報告にも体制迎合的ではない冷静なものがあつた。「何人かの集会参加者から意見を聞いた。彼らは党の命令で参加した。体制の政策に納得も支持もしていない。なぜなら、以前に戦争に行ったことがあるので、もはや再び戦争は望まないからだ。彼らは多くの人がそう考えていると見ている。」(1935年10月3日報告)。「ヴェネツィア広場の端にいた群衆はムッソリーニの演説中に熱狂や賛意も示さなかった。彼らは演説を落ち着いて静かに聴いており、演説は鼓舞としてよりもほとんど夢魔を表していた。これは多くの人の印象であつた。昨日の集会とそれに続く異例の活気は熱狂の産物ではなく、煽動と心配の状態の産物である。」。同じような留保は他の町の集会でも観察されていた。ミラノの集会でも「広場の冷淡さ」「集会を支配した非常な静けさ、歓喜と歓声の現れは非常に控えめであつた。一般に諦めと落胆の意識が顕著であり、群衆の精神は疲れている。」「人々は報復を恐れて、集会に行った」と報告している⁽⁴⁶⁾。

また、フィレンツェのファシスト教師団体のメンバーで、勤務先の学校でのその組織の責任者の女性は、彼女自身が戦争への熱狂的な国民の支持というファシストの宣伝をほとんど信じていないこと、息子を危険にさらすかもしれない母親は熱狂していないということを人々はよく知っている」と述べていたと、報告していた⁽⁴⁷⁾。

このような国民の反応の考察から、これまで一般的に受け入れられていた1935年10月の全国民的・愛国的・ファシスト的な高揚のイメージを見直すことが必要であることは明らかである。資料は、多くの人々が強制によって動いているのであり、熱狂のない、ほぼ受動的なあきらめから、そして愛国的と言うよりも心配と恐怖から行動していたことを示している⁽⁴⁸⁾。

第4節 1935年10月2日のムッソリーニ演説

ここで、10月2日のムッソリーニの演説の内容を見ておこう。「動員演説」(Il discorso della mobilitazione)と題されたこの演説は、ローマのヴェネツィア宮殿のバルコニーから行われたわずか20分のものであるが、彼のアフリカ・エチオピア観、対イギリスをはじめとする国際政治観を端的に表している。

「革命の黒シャツたち！全イタリアの男と女たち！海や山を越えて世界にいるイタリア人たちよ！聞け！」との呼びかけから始めて、「祖国の歴史で厳かなときが始まろうとしている。2千万人が全国の広場に今集まっている。」と全人口4600万人の半分近くが集まっていると誇大宣伝する。そして、「この集会は世界にイタリアとファシズムが完全に絶対的に変わることなく一体であることを示している。」とファシズムと国民との一体感を世界に対して強調する。「数ヶ月前から運命の歯車は目標に向かって動き始めた。」「軍隊だけがその目標を目指しているのではなく、4600万人の全国民が、不正義の暗黒を犯そうとする、すなわち我々からわずかな陽の当たる場所を奪おうとする人々に反対してその目標を目指している。」「われわれは13年間我慢してきた。……。エチオピアに関しては40年間も我慢してきた。もうたくさんだ。国際連盟は我々の権利を認めるところか、我々への制裁を議論している。逆の証拠もある。真に寛大なフランス国民がイタリアに対する制裁を支持するとは思わない。」「これまでイタリアと一致しなかったことがないイギリスの真の国民が、わずかな文明さえ持たないアフリカの一つの国を守るために、ヨーロッパを破局に陥れる危険を冒すことはないと信じている。」「経済制裁に対しては我々の規律、節制と犠牲的精神を対置する。軍事制裁に対しては、軍事的措置で対応する。戦争行為に対しては戦争行為で答える。」とフランスとイギリスを牽制しつつ、脅している。「我々は、この戦争がヨーロッパ戦争の性格と意味を持たないように、できることすべてを行う。」とヨーロッパ戦争にしたくな

いと希望を述べる。そして最後に、「プロレタリアの、ファシズムのイタリア、ヴィットリオ・ヴェネトの、革命のイタリア！勝利と正義の叫びだ！」と叫んで演説は終わっている⁽⁴⁹⁾。

第5節 「忠誠の日」と「帝国」の虚と実

ムッソリーニが1941年11月に、「1935年10月2日から1936年5月9日にイタリアはその歴史上、最も劇的で精力的で輝かしい時代の一つを経験した」と語り⁽⁵⁰⁾、国民の自発的・即興的で熱狂的な3つの集会として、1935年10月2日のエチオピア戦争開始宣言の全国大集会、1935年12月18日の「忠誠の日」、1936年5月9日の「帝国」樹立宣言の集会を挙げている。そこで次に、この二つ目の集会である12月18日の「忠誠の日」について見てみよう。

「忠誠の日」とは、1935年10月11日に国際連盟が総会でイタリアのエチオピア侵略に対して経済制裁の発動を決定したことに対して、イタリア国民の結束を示すために、また、貿易の決済に必要な金が不足することが予想されたために、「祖国への金」と称して、国民に金銀の結婚指輪や貴金属の供出を求めるキャンペーンを盛り上げるために政府が演出した日である。

国際連盟の経済制裁リストは1935年10月19日までに作成され、実施されていったが、イタリア経済にとっての大きな打撃は、工業生産に必要な原材料の不足とイタリアからの輸入制限によるイタリアの外貨・金準備不足をもたらしたことであり、イタリアに対する借款、信用、資本流入の禁止であった⁽⁵¹⁾。「祖国への金」運動は、国民の結束の演出という面と同時に、貿易の支払いのために国民に金を供出させるという実際の緊急の必要性を背景としていた。

「祖国への金」の供出キャンペーンは、すでに国際連盟による制裁リストが決定された直後の1935年11月から始まっており、体制の知識人たちも

積極的に協力し、煽動していた。ナショナリストの詩人ダヌンツィオは「王女から物乞いまで」が協力する供出運動を提唱していた。このキャンペーンの頂点として1935年12月18日の「忠誠の日」が設定され、ローマで実施されたヴェネツィア広場の「祖国の祭壇」前での儀式ではエレナ王妃が結婚指輪を提供し、体制は国民にこの模範に倣うように呼びかけた⁽⁵²⁾。

国際連盟による経済制裁と戦争の現実とは、それまで体制に批判的であった層も含めて政治指導層や知識人層の愛国心をかなり喚起した。この儀式の前後には、上院議長の要請に応じて、「反ファシスト知識人宣言」（1925年5月公表）の起草者の一人であった世界的に著名な自由主義知識人のB. クローチェ、『コリエーレ・デッラ・セラ』の元編集長で自由主義的保守的ジャーナリストのL. アルベルティーニ、自由主義政治家・元首相でファシスト体制への忠誠宣誓を拒否して大学教員を辞任したV. E. オランダ、社会主義者のA. ラブリオーラ（このために亡命先のフランスから帰国）までも上院議員のメダルを寄贈した⁽⁵³⁾。困難にある「祖国のために」という愛国熱が全国民的に高揚したかに見えるが、庶民のレベルではかなり異なっていた。

カトリック教会も「文明化の十字軍」としてファシストのエチオピア戦争を支持した。1935年10月28日にミラノの枢機卿シュスターは、「勇敢な軍が祖国の指令に従順かつ大胆に従って、血の代償を払ってエチオピアの門をカトリック信仰とローマ文明に開く」と説教した⁽⁵⁴⁾。

しかし、外見上の熱狂の演出にもかかわらず、実際には国民のかなりの部分は体制の煽動には冷淡であり、形式的には体制の指示に従いつつ、経済的な苦境が続く中で自己防衛を行っていた。1935年12月前後から1936年の数ヶ月間は全国で合金や鉄で作った指輪市場が盛んであった。庶民はここで合金や鉄の指輪を購入し、それを本物の金銀の指輪の代わりに供出した。また、より一般的には、質の劣った指輪を細工師に作らせ、これを供出した。政府はこれに対して指輪の融解を禁止するとともに（これはあま

り実効性がなかった)、金の登録制を実施し、すべての金のイタリア銀行への売却を強要した。こうして、人々は寄贈かイタリア銀行への売却かの選択を強いられたのであり、多くの人々は売却を選択した。1936年1月末までに集められた34,622kgの金のうち、約45%はイタリア銀行による買い上げであった⁽⁵⁵⁾。ここでも、公式の儀式的な外見と人々の自発的行動との間には距離があったのである。

このような国民の体制に対する冷淡さ・距離を置く意識も、国際連盟の経済制裁に対する政府の大々的な「祖国の危機」「愛国」「ナショナリズム」キャンペーンとエチオピアでの「仕事と土地」の夢の宣伝によって、1935年末から1936年夏頃まで一時的には減少したかに見えた。しかし、東アフリカでの仕事を求める労働者たちからの仲介料の詐取、ファシスト組織による仕事やポストの売買、あるいはペテン、そして何よりも東アフリカに現実には仕事と豊かな土地がないこと、そして労働、戦争、病気の悲惨な状態を帰国者から伝え聞くことにより、「仕事と土地」「帝国」幻想は消えていくことになる。反ファシストでもないある商人は、「アフリカへの志願兵はすべて失業者、窮乏者、ぐうたらや国内で何もすることがない者だ。アフリカに行く国や公企業の役人たちは、二重の給料や二重の年金を得ることが目的だ」と語っていた⁽⁵⁶⁾。

この証言の通り、失業者や困窮者が兵士としてあるいはファシスト志願兵としてエリトリアやエチオピア、ソマリアの「イタリア領東アフリカ」に行った。その意味では、皮肉であるが、文字通り、イタリア帝国主義は「貧者 (petit blancs) の帝国主義」「人口帝国主義」(imperialismo demografico) であった⁽⁵⁷⁾。

貧困と失業からの脱出あるいは、あわよくば一攫千金を求めて、1936-38年に60万人がエチオピアに働きに行く申請をしたが、認められたのは19.8万人だけであった。戦争準備と遂行のための道路建設等のためにエチオピアに渡った労働者たちは、戦争が一段落し、対ゲリラ戦に変わる

と仕事もなくなり、そして病気と搾取に耐えられなくなり、兵士と共に次々帰国した。イタリア領東アフリカにいる労働者は、1936年末に約14.7万人、1937年末に7.6万人、1938年末に4.9万人、1939年6月には2.4万人に激減した。つまり、支配が安定せず、鉱物資源も適切な耕作地もないイタリア領東アフリカには、イタリア人のための仕事がなかったのである。植民地当局が現地人から土地を奪い、イタリア人農民に入植させたが、農業適地はきわめて少なく、実際の農民としての入植者はごくわずかであった⁽⁵⁸⁾。イタリア経済界の大部分もリスクがきわめて大きく、利益の可能性が疑わしい「帝国」に取り組むことに対して公然と反対は言わないが、消極的であった。実際、民間経済界の投資はほとんどなく、投資は政府の公共事業だけであり、それも治安が安定しないためになかなか実施できなかった。こうして、国民は幻想の「帝国」の破綻に気づかされていった⁽⁵⁹⁾。いわば、「帝国は新しい失望」を作ったにすぎなかった⁽⁶⁰⁾。

1936年5月9日の「帝国」樹立宣言の大集会も、前年10月2日の集会と同様に周到に準備され、強制的に動員された集会であった。ファシスト党組織、関連組織はもちろん、政府各省、公企業、地方事務所においても、どうしても業務上の理由で集会に参加できない者のリストを作成し、地方ファッシュの書記に提出することを指示していた⁽⁶¹⁾。

他方、ファシスト体制の官僚や幹部は国内でもアフリカでも仕事とポストの横領と売買、賄賂に明け暮れており、まともな植民地経営と統治は行われなかったし、行う意思も力もなかった⁽⁶²⁾。

イタリアの勝利と「帝国」樹立を人々が祝ったのは事実であるが、幻想の「帝国」の巨大な風船はすぐにしぼんだ。1936年の前半には既に、アフリカから帰還した兵士や労働者から、食糧不足、無秩序、病気、砂漠、多数のイタリア人の死体の写真などの情報が人々の間に流布した。また、1936-38年の内務省報告には、一般の人々がアフリカ帰還兵の町中行进に無関心であることが記されている。体制にとって帰還兵と帰還労働者が間

題となっていた。彼らの多くは、帰国後の確実な仕事や職場復帰の宣伝を信じてアフリカに行った。しかし、帰国後その約束が果たされないことに怒り、ファシスト党や役所への抗議行動を起こした。ファシスト義勇軍や志願兵たちは、帰国後は公的な競争試験なしに国家や半国家機関のポストに就職できるであろうと信じ込まされており、実際にそのような約束で志願兵や労働者を集めた例もあった。シエーナ県知事は、現場労働者であった者が帰国後、政府の事務職への就職というとんでもない要求をしていると怒りを込めて報告している⁽⁶³⁾。

このように国民とファシスト体制とのずれと亀裂は深刻であった。この亀裂は社会の深い場所で次第に拡大していった。しかし、「帝国」に固執し、演出された体制賛美に酔いしれていたムッソリーニとファシスト幹部たちはこれに気づくことなく、より大きな「帝国」の夢の実現に向けて、つまり、ヒトラーの「ヨーロッパ新秩序」とムッソリーニの「地中海新秩序」の併存が「帝国秩序」において実現できると期待して⁽⁶⁴⁾、ドイツと日本との同盟、世界規模の戦争へと進み、国民と世界を奈落の底へ落とししていくことになった。

おわりに

「帝国」と「強国の地位」は1930年代後半のファシスト体制において中心的要素であった。しかし、「帝国」は多くのことを国民に約束したが、実際にはほとんど実現できず、人々に失望、諦めと疲れ、恨みをもたらし、人々はできるだけ政治と体制から距離を置くようになった。1937-39年のスパイの多くの報告は、人々の気分を、あきらめによる受動性、政府のレトリックへの反感の増大、国際情勢の悪化に対する不安と当惑が特徴であるとしている。「同意論」で物議を醸したしたデ・フェリーチェも、全体としては植民地の冒険は体制を強化するよりも弱体化した。相対的に安定

的な国内状況を不安定化し、ファシズムの「真の変革」に人々が抱いた期待を失望させたと述べている⁽⁶⁵⁾。

エチオピア戦争と「帝国」樹立は、ある意味では体制への束の間の「同意」を作り出した。しかし、短期間に体制の資源・活力と動員力を使い果たし、結局、体制の最終的な崩壊の始まりを示した。

P. コーナーは、ヒトラーは、ドイツ人に「民族的威信の防衛と民族のための東方の生存圏樹立」という「夢を見させ、確信させることができた」。それに比べて、農業国で貧しいイタリアでは、日常の生活の悲慘があまりに現実的でありすぎたので、ムッソリーニが提示しようとした「非日常」の夢はあまりに遠すぎたと、「帝国」の野望に国民を魅了する力の両者の違いを説明している⁽⁶⁶⁾。この比較の妥当性はともかく、イタリア・ファシズム体制は能動的な同意を国民の中に広く創り出すことができなかった。それは、イタリアの現実の力量を超えた、ファシスト体制の「威信」のための、「帝国」と「強国の地位」の実現をめざすエチオピア戦争から始まる一連の戦争に起因するものであり、それによりファシズム体制はその内部から崩壊した。

イタリアの幻想の「帝国」はあっという間に消え去った。それは、「空中楼阁」としての存在の性格が強く、「現実の歴史ではなく、実現しなかった野心の歴史」であったとさえ言われている⁽⁶⁷⁾。しかし、「帝国」の実際の消滅は第二次大戦の敗戦の結果としての植民地の喪失という形で生じたのであり、イタリア「帝国」が植民地の人々の自立・独立要求に真正面から対峙し、植民地の人々の力を認め、旧宗主国として独立を承認した結果としてではなかった。これは、英仏蘭ベルギーなどが第二次大戦後に植民地との独立をめぐる交渉や戦争を経て脱植民地化を進めた形とは大いに異なる。筆者は、英仏型を「自律的脱植民地化」、イタリア型を「他律的脱植民地化」と名づけている。この相違は各旧宗主国の戦後の旧植民地からの移住者の受け入れや市民権付与、アフリカ・アラブ認識、「帝国意

識」に大きな影響を与えたと考えられる⁽⁶⁸⁾。

この「他律的脱植民地化」の結果として、現在までのイタリア人のアフリカ・アラブ認識はある意味では1930年代のままに近いと言っても良いであろう。すなわち、「貧者の帝国主義」「人口帝国主義」というファシストの宣伝時代そのままに、「良いイタリア人」イメージが存続したのである⁽⁶⁹⁾。もちろん、それには戦後の歴代政府の責任が大きい。歴代政権は、ファシズム戦争の責任、植民地責任を回避してきた。例えば、戦後のイタリア政府がエチオピア戦争における毒ガス使用を認めたのは、戦後イタリアを支配してきたキリスト教民主党内閣が終わり、中道左派のディーニ内閣の国防大臣ドメニコ・コルチョーネによる、国会議員の質問状に対する1996年2月の回答書においてであった⁽⁷⁰⁾。デル・ボカやロシャなどの歴史研究者に証拠を突きつけられても、戦後の保守政権は否定し続けてきた。つまり、ファシスト政府だけでなく、戦後の保守政権もファシスト時代の戦争犯罪、毒ガス使用を認めることを拒否してきたのであり、戦後のエチオピア政府による指摘と抗議も無視してきた。ファシスト体制の犯罪を認めるには保守政権から中道左派政権への政権交代が必要であったのである。

毒ガス使用だけではない。アフリカでのイタリアの過酷な人種隔離政策(本国の反ユダヤ法に先立って、1937年4月19日に植民地に人種差別法が実施された)、エチオピアやリビアでの虐殺も政府やジャーナリズム界の支配的勢力は否認してきた。すでに1945年9月に、エチオピア政府は、1936年5月から1941年5月までの間に、7万5千人のエチオピア兵が戦場で殺害され、17,800人の子ども、女性、老人が爆弾で殺され、3万人が1937年のグラツィアーニ将軍の指令による大虐殺の犠牲となり、2万4千人の愛国者が軍事法廷で有罪となり、殺害され、3万5千人が強制収容所のキャンプで死亡し、30万人が村落の破壊と略奪で死に至らしめられたという内容の覚書を提出していた⁽⁷¹⁾。

しかし、アフリカ志願兵で、戦後イタリアの新聞界を支配してきたI.

モンタネッリは1995年になっても、「他の諸国の植民地主義と比較して、わが国のそれはもっとも人間的であった、あるいはもっとも非人間的ではなかったと私は確信する。エリトリア人はいうまでもなく、エチオピア人自身がイタリア人に対して抱く記憶も、それを証明している」と書いていた⁽⁷²⁾。イタリア人はイタリアの植民地支配の実態を都合良く忘れ、美しい虚構の「ファチエッタ・ネーラ」（黒く可愛い顔）の歌のイメージがイタリアの植民地支配として記憶されていたのである⁽⁷³⁾。

そのようなアフリカ・アラブ認識を根底に持ったまま、本稿の「はじめに」に書いたようなアフリカ・アラブ難民が、かつての「ローマの海」である地中海を越えてやってくる「来襲」に直面した時に生じる「アラブ・アフリカ認識」には、イタリア特有の人種意識が反映されと考えられる。これについては、別の機会に論じることとしたい。

本稿は日本学術振興会科学研究費基盤研究C、課題番号 26380196「新しいレイシズムとファシズムのアラブ・アフリカ認識：他律的脱植民地化の陥穽」（平成26-28年度）及び基盤研究B、課題番号 24330049「『再国民化』の比較政治学——ヨーロッパ・デモクラシーのジレンマ」（代表：石田徹）（平成24-26年度）の研究成果の一部である。

- (1) イタリアは1911年の対トルコ戦争でリビアを攻撃・獲得したが、第1次大戦中に現地のアラブ側の抵抗勢力の反撃に遭い、イタリアの支配は海岸沿いの地域へと後退させられていた。ファシズム体制になり、のちのエチオピア戦争でも重要な役割を果たすバドリオ総督、グラツィアーニ副総督等の指揮の下、抵抗運動への激しい弾圧、住民とゲリラ勢力との分断のための強制収容所の設置（過酷な扱いによって約8万～10万人の収容者が死亡）などにより、リビア再征服が行われた。1922年1月に自由主義の政府時代に開始されたこの再征服は、ファシスト体制との連続性を特徴としている。当初の主役は、G. ヴォルピ（1921～25年、トリポリ総督、後に蔵相）とG. アメンドラ植民地相（反ファシストの自由主義的政治家、1925年にファシスト体制が送った刺客に殺害された）であったことがそれを示している。しかし、ゲリ

ラと住民との分断を目的とした強制収容所への住民の収容は、その残酷な取り扱いによる大量死亡、遊牧民の唯一の財産である家畜の大量死などの点から、従来の植民地戦争・支配と比べると、「質的な飛躍」と言える。石田憲『ファシストの戦争』千倉書房、2011年、9、64-65頁。リビア再征服の概略については、アンジェロ・デル・ボカ編著、高橋武智日本語版監修『ムッソリーニの毒ガス』大月書店、2000年、xiii-xix頁 (A. Del Boca, *i gas di Mussolini. Il fascismo e la guerra d'Etiopia*, Riuniti, 1996); C. G. Segrè, *l'Italia in Libia. Dall'età giolittiana a Gheddafi*, Feltrinelli, Milano, 1978; G. Rocha, *Le guerre italiane 1935-1943. Dall'impero d'Etiopia alla disfatta*, Einaudi, Torino, 2005, pp. 5-14。イタリアの海外植民地獲得の歴史全体については、N. Labanca, *Oltremare: storia dell'espansione coloniale italiana*, Bologna, il Mulino, 2002.; P. Palumbo, *A Place in the Sun: Africa in Italian Colonial Culture from Post-Unification to the Present*, University of California Press, Berkeley, 2003。1935-36年のエチオピア戦争の人々の記憶については、N. Labanca, *Una guerra per l'impero: memorie della campagna d'Etiopia 1935-36*, Bologna, il Mulino, 2005。

- (2) R. De Felice, *Mussolini il duce. vol. 1, Gli anni del consenso 1929-1936*, Einaudi, Torino, 1974; Id., *Mussolini il duce. vol. 2, Lo stato totalitario 1936-1940*, Einaudi, Torino, 1981。R. デ・フェリーチェ著、西川知一・村上信一郎訳『ファシズムを語る』(ミネルヴァ書房、1979年) 参照。
- (3) 石田憲『地中海新ローマ帝国への道 ファシスト・イタリアの対外政策 1935-1939』東京大学出版会、1994年、第1章、第2章参照。
- (4) G. Rocha, *La guerra italiana in Etiopia: modernità e limiti*, in *L'impero fascista*, a cura di R. Bottoni, il Mulino, Bologna, 2008, p. 108。
- (5) N. Labanca, *L'impero del fascismo. Lo stato degli studi*, in *L'impero fascista*, a cura di R. Bottoni, cit., pp. 35-36。この論文は、戦後におけるイタリア植民地主義研究を概観している。
- (6) E. Ludwig, *Colloqui con Mussolini*. Traduzione di Tomeso Gnoli, Verona, Mondadori, 1932, pp. 62-68。このインタビューで、ムッソリーニは「国民の地位は戦争におけるその力によって定まってきた。」とか、自分の野望は「国民の改造」であると述べている。bid., pp. 10, 64。
- (7) 征服後に実施された簡単な鉱物資源調査でも重要な資源は発見されなかった。その報告書では、イタリア経済が特に不足している基本的な原料について、イタリアとアフリカが与えるものはほとんど何もないと報告されている。G. トニオロ著、浅井良夫・C. モルテーニ訳『イタリア・ファシズム経済』名古屋大学出版会、1993年、212-216、283頁注192。
- (8) R. De Felice, *Mussolini il duce. vol. 1*, cit., pp. 416-417, 604。石田憲『地中海新ローマ帝国への道』前掲、37頁
- (9) Partito Nazionale Fascista, *Mostra della Rivoluzione Fascista*: Guida

- storica a cura di Dino Alfieri e Luigi Freddi, 1933.
- (10) 高橋進『イタリア・ファシズムの思想と構造』法律文化社、1997年、154-155頁。E. R. Tannenbaum, *The Fascist Experience. Italian Society and Culture 1922-1945*, Basic Books, New York, 1972, p. 65; Partito Nazionale Fascista, *Mostra della Rivoluzione Fascista*, cit., p. 246. このガイドブックにはファシスト体制の成果の展覧会が準備中であると書かれていた。
 - (11) R. De Felice, *Mussolini il duce*, vol. 1, p. 305 n.1. ファシズム体制によるローマ市改造については、藤沢房俊『第三のローマ』新書館、2001年、Ⅵ章参照。
 - (12) 1932年4月30日のファシスト党全国指導部の決定。Partito Nazionale Fascista, *Atti del PNF. 7 dicembre 1931-28 ottobre 1932*, Fratelli Palombi, Roma, 1933, pp. 24-25. ドーボラヴォーロを通じて、ローマ見物の旅行を兼ねて、展覧会や各種の博覧会に全国から国民を動員し、ファシズム体制の成果を認識させようとした。
 - (13) R. De Felice, *Mussolini il duce*, vol. 1, cit., p. 65.
 - (14) 高橋進『イタリア・ファシズムの思想と構造』前掲、第3章3。政府は失業対策として公共事業に取り組んだ。1933-34会計年度の公共事業予算は、11.5億リラで、海軍省の13.6億リラに迫る金額であった。しかし、1934-35年度は10.6億リラ、36-37年度は9.8億リラへと減少している。R. De Felice, *Mussolini il duce*, vol. 1. pp. 77, 145 n.2.
 - (15) P. Corner, *The Fascist Party and Popular Opinion in Mussolini's Italy*, Oxford, Oxford University Press, 2012, p. 180-192.
 - (16) D. L. Germino, *The Italian Fascist Party in Power*, University of Minnesota Press, 1959, (rep.) New York, Haword Fertig, 1971, p. 52.
 - (17) 高橋進『イタリア・ファシズム体制の思想と構造』140頁、表2-5。ファシズム研究会編『戦士の革命・生産者の国家』太陽書房、1985年、368頁表1-1参照。
 - (18) A. Aquarone, *L'organizzazione dello stato totalitario*, Torino, Einaudi, p. 581.
 - (19) P. Corner, *The Fascist Party*, cit., p. 192; A. Canepa, *L'organizzazione del P. N. F.*, F., Ciuni Libraio Editore, Palermo, 1939, p. 95.
 - (20) E. Gentile, *Il culto del littorio*, 1993; R. De Felice, *Mussolini il duce*, vol. 1, cit., pp. 217-225.
 - (21) G. Rocha, *La guerra italiana in Etiopia* cit., p. 108.
 - (22) 石田憲のなぜエチオピア戦争をはじめ、スペイン戦争にファシスト義勇軍が派遣されることになったのかという問いかけは、イタリア・ファシズムの特徴を考察する上で重要な問題提起である。ナチスが占領地に派遣したのは国防軍とナチ親衛隊という正規の組織であることと比較すると、その違いが分かる。従来は、イタリア統一運動期のガリバルディの「赤シャツ隊」の延

長上でイタリア史における義勇軍の伝統という文脈で理解されることが多かったが、イタリア・ファシスト体制の特徴として改めて検討する意味がある。石田憲は、ファシズムの起源と理念が小集団の結束による自発的な行動隊にあったことを、ファシストの戦争における義勇軍重視の大きな理由としている。石田憲『地中海新ローマ帝国への道』前掲、80頁参照。筆者は現段階では、ファシスト党組織の活性化と失業対策の2つをその理由と考えている。ファシスト大評議会の議事項目に関しては、高橋進「イタリア・ファシズム体制論——ファシズム大評議会と閣議（2）——」『龍谷法学』37巻4号、2005年3月、96頁表1。同じ会議で、失業者を減らすために、労働時間を週40時間に減らすことも決定している。このことから、1935年初めでもイタリアでは失業問題が深刻であったことが分かる。

- (23) *Documenti diplomatici italiani*, 7 serie, vol. 16, pp. 366-369.
- (24) イタリアと英仏との交渉や国際連盟による経済制裁については、石田憲『地中海新ローマ帝国への道』前掲、37-98頁参照。
- (25) B. Mussolini, *Opera omnia di Benito Mussolini*, a cura di Edoardo e Duilio Susmel, La Fenice, Firenze, 1959, vol. XXVII, pp. 106-110.
- (26) G. Rocha, La guerra italiana in Etiopia: modernità e limiti. in *L'impero fascista*, a cura di R. Bottoni, p. 105.
- (27) 石田憲『ファシストの戦争』前掲、58-70頁。
- (28) R. Rocha, *Le guerre italiane 1935-1943. Dall'impero d'Etiopia alla disfatta*, Einaudi, Torino, 2008, p. 129, Tabella 11; G. Rocha, La guerra italiana in Etiopia, cit., pp. 106-107. 送られた装備に関する軍の記録では、東アフリカとリビアとの送付先が区別されておらず、正確さに若干かける面がある。ただ、リビア送付の装備の一部はその後、エリトリアやソマリアにも送られている。Ibid., p. 106, n.4.
- (29) 石田憲『ファシストの戦争』前掲、59頁の地図参照。1936年12月31日付けのムッソリーニからグラツィアーニ宛の電報では、当時、イタリア領東アフリカに209,126人の兵士、12,450人の将校、15,160人の下士官、109,353人の現地兵、合計約34万人がおり、過剰であり、財政を圧迫していると書いていた。Archivio Centrale dello Stato, Fondazione Graziani, Sc.28: il secondo anno d'Etiopia.
- (30) G. Rocha, *Le guerre italiane 1935-1943*, cit., pp. 137-138, n.13.
- (31) G. Rocha, *Le guerre italiane 1935-1943*, cit., pp. 137-139. スペイン干渉戦争での支出は、上記の会計検査院の計算では、合計85億リラとされている。
- (32) ファシズム体制下の庶民の生活については、ジャン・フランコ・ヴェネ著、柴野均訳『ファシズム体制下のイタリア人の暮らし』白水社、1996年 (Gian Franco Venè, *Mille lire al mese*, Mondadori, Milano, 1988) 参照
- (33) P. Corner, L'opinione popolare italiana di fronte alla guerra d'Etiopia, in *L'impero fascista* cit., pp. 167-168; S. Colarizi, *L'opinione degli italiani sotto*

- il regime 1929-1943*, Laterza, Roma-Bari, prima ed. 1992, Biblioteca Universale Laterza, seconda ed., 2009, pp. 16-18.
- (34) P. Corner, *L'opinione popolare italiana*, cit., pp. 168-169. チアーノについては、石田憲『地中海新ローマ帝国への道』前掲、同『ファシストの戦争』前掲、G. B. Guerri, *Galeazzo Ciano: Una vita 1903/1944*, Bompiani, Milano, 1979.
- (35) P. Corner, *L'opinione popolare italiana*, cit., pp. 170-171, n.4; R. De Felice, *Mussolini il duce*, vol. 1, Gli anni del consenso 1929-1936, pp. 620-621.
- (36) P. Corner, *L'opinione popolare italiana*, cit., p. 171.
- (37) P. Corner, *L'opinione popolare italiana*, cit., p. 171.
- (38) P. Corner, *L'opinione popolare italiana*, cit., p. 171 n.8.
- (39) P. Corner, *L'opinione popolare italiana*, cit., p. 172.
- (40) カルロ・レーヴィ著、清水三郎治訳『キリストはエボリに止まりぬ』岩波書店、1953年、139頁。上村忠男『カルロ・レーヴィ「キリストはエボリで止まってしまった」を読む』（平凡社、2010年）は、同書の解説書であると同時に、ファシズム時代の南部農村社会の深い分析を行っている。
- (41) G. トニオロ著、浅井良夫・C. マルティエーニ訳『イタリア・ファシズム経済』名古屋大学出版会、1993年、111頁表4-7、117頁表4-9、179頁参照。
- (42) P. Corner, *L'opinione popolare italiana* cit., p. 172, n.10; P. Corner, *The Fascist Party* cit., p. 195. 1941年の学部別登録学生数は、経済・商学2.7万人、法学2.2万人、文学・哲学1.8万人、医学1.6万人で、工学はわずかに5,400人であった。1934年と1941年を比べると、法学1.7倍、経済・商学2.6倍、文学3.6倍であるから、工業・技術開発の需要により大学生が激増したのではないことが分かる。1941年7月から徴兵猶予はなくなり、徐々に召集された。しかし、医学・薬学・獣医学の学生に対しては、様々な特別措置がとられた。1913年から1942年までの大学生の学部別在籍者数については、ファシズム研究会編『イタリア・ファシズム 戦士の革命・生産者の国家』太陽出版、1985年、376-377頁表7-3参照。G. Rochat, *Le guerre italiane 1935-1943* cit., pp. 316-318.
- (43) P. Corner, *L'opinione popolare italiana* cit., pp. 173-174.
- (44) P. Corner, *L'opinione popolare italiana* cit., pp. 174-175 e n.13, 14, 15; P. Corner, *The Fascist Party* cit., pp. 195-196. スパイの一部は、この必死さをファシズムの大義への熱意の表れと解釈していた。
- (45) P. Corner, *L'opinione popolare italiana* cit., p. 175 and n.17; P. Corner, *The Fascist Party* cit., pp. 196-197.
- (46) P. Corner, *L'opinione popolare italiana* cit., p. 176.
- (47) P. Corner, *The Fascist Party* cit., p. 198.
- (48) P. Corner, *L'opinione popolare italiana* cit., p. 177.
- (49) B. Mussolini, *Opera omnia*, vol. XXVII, PP. 158-160. 「ヴィットリオ・

ヴェネト」とは、第一次大戦のオーストリアとの闘いで、イタリアが後退・敗北から勝利に転じた北イタリアの「ヴィットリオ・ヴェネトの戦い」を指す。

- (50) B. Mussolini, *Opera omnia*, vol. XXXIV, p. 210. 1941年8月7日に死亡した3男のブルーノの思い出をつづった本“Parlo con Bruno”の中の一文。
- (51) 石田憲『地中海新ローマ帝国への道』前掲、71頁参照。
- (52) 石田憲『ファシストの戦争』前掲、169頁。P. Corner, *The Fascist Party* cit., p. 199.
- (53) シモーナ・コラリーツィ著、村上信一郎監訳、橋本勝雄訳『イタリア20世紀史』名古屋大学出版会、2010年、186頁。クロッチェは政府の政策を支持しないと明確に表明しつつ、国際連盟による制裁に対して体制が推進した金の収集に各自の上院議員のメダルを提供することを求める上院議長長の要請を、「祖国の名の下での寄贈」として受け入れた。上院議長長の要請に応じて、419人の上院議員のうち、414人が上院議員のメダルを政府に提供した。R. De Felice, *Mussolini il duce*, vol. 1, p. 627 e n.l. 石田憲『ファシストの戦争』前掲、169頁。ムッソリーニは1935年12月30日の閣議で最近の国際情勢及び国内情勢について報告しているが、その中で金の収集の「感動的」なエピソードを紹介し、この12月18日の集会の「人民投票の性格」を述べている。Archivio Centrale dello Stato, Verbali del Consiglio dei Ministri, N.20 Dal agosto 1935 al giugno 1936, pp. 72-73.
- (54) R. De Felice, *Mussolini il duce*, vol. 1, pp. 624-625.
- (55) 石田憲、前掲、『ファシストの戦争』169-170頁。このキャンペーンでは、金だけでなく銀、銅、鉄なども集められた。公式統計によれば、銀は約93,500 kg、銅は約1,530,000 kg、1億900万 kgの鉄くずが集まったとされている。収集運動はその後、現金、外国貨幣、債権、軍人証書、功労金帳、義勇兵メダルなど他の「価値あるもの」にまで広げられ、1938年まで続いた。P. Corner, *L'opinione popolare italiana* cit., pp. 178-179; P. Corner, *The Fascist Party* cit., p. 200; R. De Felice, *Mussolini il duce*, vol. 1, pp. 626-627, p. 627 n.2.
- (56) P. Corner, *L'opinione popolare italiana* cit., p. 181.
- (57) N. Labanca, *Posti al sole*, Museo storico italiano della guerra, Rovera, 2001, p. V-XLI. ミヘルズがすでに1914年にイタリア帝国主義を「人口帝国主義」と名付けていた。
- (58) リビアを含めて、仕事を求めてアフリカに行った労働者や農民の成功も失敗も含めた多様な状況、「帝国」と植民地の記憶については、N. ラバンカによる労働者や農民の日記や回想記の編著が有益である。N. Labanca, *Posti al sole* cit.
- (59) R. De Felice, *Mussolini il duce*, vol. 1, pp. 784-785. F. Guarneri, *Battaglie economiche*, pp. 387 seg. 石田憲はこれを「植民地経営なき帝国の成立」と

特徴づけている。石田憲『地中海新ローマ帝国』前掲、92頁。他方、壮大な都市計画だけは、アジスアベバやゴンダールについて立てられていた。ACS, Fondo Graziani Sc.29. エチオピアにおけるイタリアの植民地主義政策全般については、A. Sbacchi, *Il colonialismo italiano in Etiopia 1936-1940*, Mursia, Milano, 1990.

- (60) 1937年2月18日のミラノのスパイの報告は、「帝国は新たな失望になるであろう。イタリア国民に巨大な負担を課し、何も得ることのできない所に国民の全財産を浪費することになる」という民衆の怒りの声を伝えている。民衆は自分たちの悲惨な状態の主な原因が体制の進める植民地＝「帝国」の夢にあると考え始めていたのである。S. Colarizi, *L'opinione degli italiani* cit., p. 220.
- (61) P. Corner, *L'opinione popolare italiana* cit., p. 182, n.39.
- (62) P. Corner, *L'opinione popolare italiana* cit., p. 181.
- (63) P. Corner, *L'opinione popolare italiana* cit., pp. 182-183. ACS, Min. Int. Dggs, Agr, Cl, 1935-1940 Conflitto Italo-Etiopia, b.18. フィレンツェ県知事からの1936年10月6日の内務省への報告では、チアーノの演説があったときに、東アフリカからの帰還兵が「俺たちは戦った。俺たちは仕事が欲しい」と叫んだと述べられていた。ACS, Min. Int. Dggs, Agr, Cl, 1935-1940 Conflitto Italo-Etiopia b.17. 1937年5月8日にも東アフリカからの帰還兵が仕事を得ることができていないことについて覚書を作成して、5月9日のセレモニーの時にムッソリーニに提出しようとしていると報告されている。ACS, Min. Int. Dggs, Agr, Cl, 1935-1940 Conflitto Italo-Etiopia b.18. カラーラ県でも、帰還兵たちが仕事に就けないことから不満を抱き、県庁にデモに行く計画をしていると報告されていた。ibid.
- (64) N. Labanca, *L'impero del fascismo* cit., p. 46.
- (65) R. De Felice, *Mussolini il duce*, vol. 1, pp. 778 ss.
- (66) P. Corner, *L'opinione popolare italiana* cit., pp. 184-185.
- (67) N. Labanca, *L'impero del fascismo* cit., pp. 36, 42.
- (68) 「他律的」脱植民地化概念については、荒井信一『戦争責任論』岩波書店、1995年、194-195頁。脱植民地化の比較については、永原陽子編『植民地責任論——脱植民地化の比較史』青木書店、2009年、参照。N. ラバンカは、「他律的脱植民地化」という言葉を使っていないが、イタリアと英仏の脱植民地化過程の違いに着目し、それとの関係でイタリアにおける植民地研究の「脱植民地化」の遅れの問題を指摘している。イタリアのエチオピア支配についてのエチオピア側からの認識、イタリア人のアフリカ植民地主義の忘却と記憶、人種隔離などについては、B. Zewde, *L'occupazione italiana dell'Etiopia: documenti, ricordi, conseguenze*, in R. Bottoni (a cura di) *L'impero fascista* cit.; A. Triulzi, *Ritorni di memoria nell'Italia postcoloniale*, in R. Bottoni (a cura di), *L'impero fascista* cit.; G. C. Novati, *L'Italia in Africa*:

come dimenticare il colonialismo, in *ibid.*; G. Barrera, *Sessualità e segregazione nella terre dell'Impero*, in *ibid.*

- (69) A. Del Boca, *Italiani, brava gente?* Un mito duro a morire, Neri Pozza, Vicenza, 2005. デル・ボカはこの認識を鋭く批判している。このようなイタリア人の歴史認識については、高橋進「戦争犯罪・人道犯罪と国家責任——イタリアの場合——」『龍谷法学』42巻4号、2010年3月、参照。
- (70) アンジェロ・デル・ボカ「真実のための長い闘い」、アンジェロ・デル・ボカ編著『ムッソリーニの毒ガス』前掲、40頁。
- (71) A. Del Boca, Prefazione, in M. Dominioni, *Lo sfascio dell'impero. Gli italiani in Etiopia 1936-1941*, Laterza, Roma-Bari, 2008, p. XI. 同書はイタリアのエチオピアの占領行政と各段階の戦争、エチオピアの側の抵抗と解放、イタリア「帝国」の解体までを詳細に分析している。
- (72) アンジェロ・デル・ボカ「真実のための長い闘い」前掲、27頁。
- (73) 人種法によってイタリア人とエチオピア現地人との「混血」が禁止され、人種隔離政策が採用された結果、ファシストの植民地主義的宣伝、すなわち「解放者としてのイタリア」の神話の宣伝に利用してきた「ファチエッタ・ネーラ」の歌は、現地の女性との混血関係を暗示するものとして禁じられるようになった。マルコ・ズバラグリ (ママ, M. Sbaragli) 「本書を読む人のために」、アンジェロ・デル・ボカ編著『ムッソリーニの毒ガス』前掲、XXIV。